

平成 31 年度自己評価シート(中間評価)

校番	24	学校名	賀茂高等学校	校長氏名	大石 秀邦	③定・通	③本・分
----	----	-----	--------	------	-------	------	------

学校経営目標				
達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等
1 学ぶ：生涯にわたり学び成長する「優れた学習者」を育てる。				
「活用と協働」を取り入れた学びが機能している。	○各単元で必ず「活用（アウトプット）」の時間を取り入れるとともに、1・2学年の全科目で「パフォーマンス課題」を用いた学習指導を複数回実施する。	B	生徒アンケートで、70%以上の生徒が活用学習によって前向きに取り組んでいるという授業は、全体の 95.9%であった。	教務
	○アウトプットを志向した授業に関する研修会を複数回行う。	B	8月に、校内研修(共通テストの分析結果を活かした授業改善, カリキュラム・マネジメント 各1コマ)を実施した。	
	○協働学習を通して課題発見・問題解決に積極的に関わる。	B	生徒アンケートで、「協働的な活動によって理解が深まった」と70%以上の生徒が回答した授業の割合は全体の 93%であった。	
グローバル社会を見据えたキャリア教育を展開している。	東広島フィールドワーク、東京研修旅行における班別研修等を通じて、地元地域と世界との繋がりを認識し、課題を見つけ、その解決を考えさせる。	B	東広島フィールドワークでは、研究班で設定したりサーチクエストの検証を行うために企業等を訪問し、その結果をポスターセッションで発表した。	2学年会
	1学年「総合的な探究の時間」に、国際交流の時間を効果的に複数回設定する。		総合的な探究の時間での国際交流の実施は、年間計画ではこれからである。	1学年会
	姉妹校との国際交流を進める(姉妹校訪問・修学旅行団受入れ・年賀状交流等)。	B	7月の暑中見舞いで最初の交流を行った。8月に姉妹校交流訪問を実施し、15名の生徒が参加した。	
実際に姉妹校交流に参加した生徒に報告の場を設定する。		C	参加者は9月中旬に報告書を提出予定である。	

【評価結果の分析】

① 「活用と協働」を取り入れた学び

- ・1学期末のアンケート結果は、目標値を達成している。昨年度の同時期の数値(89.5%)も上回っている。
- ・研修会において、分析力・活用力の伸長を目指した授業改善、定期考査問題の作成、「賀茂コンピテンシー」育成のための評価指標の作成と活用が課題として明確になった。
- ・1学期末のアンケート結果は、目標値はほぼ達成している。昨年度の同時期の数値(91%)も上回っている。

② グローバル社会を見据えたキャリア教育

- ・国際交流に向けた準備計画は順調である。
- ・第1学年生徒にとっては、姉妹校にまだ馴染みがなく、暑中見舞いも書かされている感がなくもなかった。

【今後の改善方策】

- ① 「活用と協働」を取り入れた学びをさらに推進する。

- ・教科会等で授業の在り方について検討する。1学期後半の互見授業に加えて、2学期以降も授業の公開や参観の機会を設ける。シラバスの計画通り、パフォーマンス課題を実施する。
- ・10月下旬に、外部指導者を迎えて、地歴・数学・保健体育・外国語(英語)の各教科が公開授業研究会を実施する。この研究授業や授業検討会を通して、目指すべき授業像について理解を深めていく。
- ・教科会等で授業の在り方について検討する。1学期後半の互見授業に加えて、2学期以降も授業の公開や参観の機会を設ける。

②グローバル社会を見据えたキャリア教育

- ・10月の姉妹校修学旅行団との交流及び11月の広島大学大学院国際協力研究科留学生との交流で、生徒がそれぞれの役割を担った交流ができるよう企画を進めていく。
- ・10月の修学旅行団との交流ではGAPでの取組を合わせながら、交流内容を組み立てていく。修学旅行団との交流で年賀状交流が深まるよう取り組む。
- ・参加者全員が報告書を提出し、様々な場面で還元できるようにする。
- ・学校のHPやPTA広報誌に姉妹校交流の報告書を掲載する。

学校経営目標				
達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等
2 挑む：高い目標を持ち、それに向けて自律した行動が取れる生徒を育てる。				
広島大学への合格者数を増やす。	教員が大学入試問題研究に取り組み、広島大学に合格できるレベルと対策を把握し、授業に反映させる。	B	各教科で、センター試験問題や広島大学の入試問題を研究し、授業に反映させている。そのため、民間の入試問題研究会にも教科で主体的に参加している。	進路指導
	模試等の効果的な利用を徹底するとともに、広島大学を意識した補習を展開する。	B	放課後補習、休業中の補習授業および土曜補習を実施している。模試成績を分析し指導に反映させている。	
	模試結果から、志望生徒の課題を明らかにし、個別の学習指導を計画・実施する。	B	1～3学年まで模試データの提供と進路検討会を実施し、成績・度数分布の推移や学年比較・他校比較を報告。各教科で対策を検討し、授業改善と生徒の個別指導等に活かしている。	
学力向上と部活動との両立ができている。	自ら設定した目標を実現するため、逆算して現在の行動を決定していくことができるよう指導していく。	B	進路LHRの中で自己の将来について考えさせている。Classiや賀茂手帳を使つてのスケジュール管理や学習時間記録、長期休業中の計画表を作成させることで、逆算して行動できるよう促している。1学年が47.6、2学年が49.8である。3学年では8月マーク模試で6科目受験者の40%が全国平均点を超えている。	進路指導
	学年会の協力のもと、SHRを利用して教科小テストを実施するとともに論理的な文章の読解力を育成する。	B	SHRの小テストは、2・3学年は国・数・英を実施し1学年は2学期から国・英で実施予定である。モーニングコラムは、週2回ペースで実施している。3学年7月記述、国語51.1、数学47.3、英語49.8である。	

	毎日復習をすることによって得られる学習効果について、学年集会や通信、個人面談を通して生徒一人一人に周知する。	B	学習の記録に対して、各担任がコメントを書き込み、復習をすることで得られる学習効果について生徒一人一人に周知している。	
	学習活動の履歴や成果を適切にまとめる (e-Portfolio) の習慣を確立する。	B	大半の生徒が習慣化している。1学期7月1週目の平均学習時間が1学年で1日あたり平均133分、2学年が165分、3学年が229分である。	
	部活動指導の一環として、部員への学習の自覚を促す指導を行い、文武一体を目指していくという実感を持たせる。	B	部活動をしていた3年生は学習への意欲は高いのではないかと考える。ただ、1・2年生は与えられたことが精一杯のようだ。	特別活動
	GTEC 全員受験に対応するために、タイムリーな時期に、授業及び課題によって、適切な指導を行う。	B	第1学年が7月に実施した GTEC ではトータルスコア平均が1000点満点の671.7であった。年度当初の目標が600であったことを考えると目標を達成しているが、全国平均が722であるので、十分に満足できる結果とは言えない。第2学年は8月末に受験したので結果が戻っていない。	英語科

#### 【評価結果の分析】

##### ① 広島大学合格者数の増加

- ・国公立大学の入試問題や主要大学別オープン・実践模試問題を入手し、指導用の資料を充実させている。授業や補習においては、問題演習等で折りに触れて広島大学の問題を導入して実施した。
- ・模試の復習ノート等の作成を各学年で取り組み、特に誤答や弱点分野の補強を意識した授業を展開している。例年通り夏季補習日程を組み、弱点教科では並行して土曜講座に参加できる体制を整えた。
- ・FINESYSTEM WEB 版の活用により、各担任は模試分析の中に、教科・科目毎・設問別の他校比較等に加え、授業や補習で、データを活用することで、弱点の補強に努めることが可能となっている。

##### ② 学力向上と部活動との両立

- ・1学年で学部学科案内、2学年では大学出張講義を実施し、進路目標を定めるための手立てを行った。また、「予習→授業→復習」のサイクルのさらなる確立のための模試の復習ノートに加え、効果的な週末課題の提示などにより家庭学習時間の向上につながる効果が期待できる。
- ・Classi や学習時間記録シートに書いた内容を生徒と担任が共有し指導に活かすことができた。教科担当者とも学年団の中では共有できたが、学年間で共有するための方法が確立していない。
- ・紙媒体だと朝の SHR 等を使ってその場で書かせることができるが、Classi では生徒は家庭に帰って、自主的に記入しなければならないので徹底が難しい面もある。
- ・3年生は部活動を引退までやり遂げたという充実感からか自らの進路への努力へとつながっている。ただ、1・2年生は与えられたことが精一杯のようだ。

#### 【今後の改善方策】

##### ① 広島大学合格者数の増加

- ・AOや推薦入試に挑戦する生徒の、出願・小論文・面接指導担当者を全教科に割り当て、丁寧に指導していく。終了後は早期に切り替えを行い、センターや2次の力をつけることができるよう教員が出来るだけ問題を多く解いた上で、指導できるようにする。
- ・教員側から補習の回数や時間をかけることのみならず、個別指導で添削をして理解を深めさせる指導を密にしていく。
- ・会議で詳細なデータを提供するのみでなく、そのデータや評定平均値等の情報から AO や推薦入試を受けるべきか否か等、進路選択の是非まで分析し、組織的な進路指導が出来るように目指す。

② 学力向上と部活動との両立

- ・Classi や賀茂手帳, 学習時間記録シートの活用で学習習慣も定着し, 2学年は模試の成績も安定してきたが, 1学年はまだ学習習慣がついていないという課題がある。新テストへ向けて1・2学年は試行錯誤が続いているが, 本校のベストの進路指導の方策を模索しつつ引き続き今行っていることを確実に実施していきたい。
- ・朝の小テストは, 副担任の先生方には負担であるが継続していきたい。
- ・学習時間記録シートや模試分析の中で明らかになった学習課題を定着させるための手立てを行う。
- ・朝の SHR の中で実施可能な教科及び科目の確認プリントや小テストを継続的に実施していく。
- ・Classi への入力習慣化していない生徒には, 校内の情報教室の PC を使用させて入力させる。
- ・各部の部員としての自覚を持たせ, 挨拶や礼儀などを徹底指導する。部顧問と担任, 教科担当が密に連携し, 指導する。

学校経営目標				
達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等
3 貢献する：規範意識が高く、他者を思いやり貢献する生徒を育てる。				
1人1リーダー制が機能し、他者を認め、貢献することができる。	委員会活動や生徒会行事などを通じて、生徒個々に自主性を発揮させながら集団へ貢献しようとする気持ちを育てる。	A	各行事で生徒達がそれぞれの役割に責任を持って行動し、行事の成功につながった。	特別活動
	全校集会や学年集会など、機会あるごとに社会における挨拶の大切さについて講話をする。	B	始業式・終業式・学園祭等、講話の機会がある度に生き方、在り方について触れ、挨拶にとどまらず、広く人とのかかわり方について触れている。	生徒指導
	教職員から率先して、挨拶をする。	B	朝夕の登校・下校指導において、生徒指導部および当番の教職員が率先して挨拶・声かけをしている。また廊下でも出会った生徒に挨拶をしている。	
	美化委員会を中心に学校環境の向上に対する意識を高め、美化活動や校内清掃を活性化する。	B	1回目は84.4%、2回目は90.6%、平均すると87.8%であり、概ね目標に達しているため。	環境保健

【評価結果の分析】

- ・講話については、機会あるごと丁寧におこなっている。その効果については客観的な数値がないので評価が困難であるが、実感として笑顔で挨拶をする生徒が増えたと感じる。
- ・教員が率先して挨拶することは、日々実践されている。積極的に挨拶をしている生徒も多いが、心の通う挨拶になっているかどうか課題である。
- ・特に生徒会理事においては各委員会を動かし、生徒たちで責任を持って活動していこうとする動きがみられた。各委員会も責任を持って行動できた。
- ・掃除点検の1回目はPTA総会前日、2回目は終業式前に行い、掃除の目標を意識させることができた。平素、掃除が行き届かない所をあえて点検項目に含めたため「できていない」が若干多くなったと考えられる。

【今後の改善方策】

- ・心の通うような自発的な挨拶を目標とし、引き続き、機会をとらえて生き方、在り方を中心とする人とのかかわり方について触れていく。自発的に行動変容が起こるような話をしていきたい。
- ・教員による挨拶は日々実践されている。挨拶の効果を増すためにも、プラス一言の実践を促していきたい。
- ・生徒会理事に、後期は校内を見渡し、自分たちができることを考えさせるとともに、各委員会でも出てきた議題を各クラスにおいて共有を徹底させるとともに積極的にクラスを動かしていけるようにさせる。
- ・掃除点検の結果を公表し、翌日からの掃除の重点項目として活用する。美化委員と掃除監督、担当の掃除班生徒が点検の結果を共有できるよう学年会等を通して積極的に掃除の実態と改善点を周知する。

学校経営目標				
達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等
4 広報活動を充実する：保護者・地域の信頼と期待を高め、誇りが持てる学校にする。				
保護者や地域社会に対して、積極的に情報を発信する。	ホームページに学校の活動内容を具体的に盛り込む（生徒会活動、学校行事、部活動実績、地域ボランティア等）。	A	8月末時点において1か月の平均アクセス数が約4,439件である。	総務
	閲覧しやすいページづくりに努める（トップページやショートカットの精選等）。	A	8月末時点において更新回数が110件である。	
中学生へ効果的なアピールを行う。	オープンスクールに、生徒を積極的に登場させ、中学生へのアピールとする。	B	目標の600人に対して申し込み総数が540名であり、実参加者数が532名となった。	総務
	「賀茂高だより」を定期的に発刊する。	A	上期の8月末時点において発行数が4回である。	

#### 【評価結果の分析】

##### ① 積極的な情報発信

- ・月の平均アクセス数が4000件以上と安定しており、ホームページが学校からの情報発信ツールとして保護者、地域社会に認知されていることがわかる。
- ・校長 eyes による更新が頻繁に行われていること、各種通信物による更新が定期的に行われていることがホームページの更新回数増加の大きな要因になっている。

##### ② 中学生へのアピール

- ・オープンスクールへの実参加者数が昨年より約20名減少しているが、近隣の中学3年生の人数の減少が影響していると考えられる。在校生による進行や案内は高い評価を得ており、中学生に対し有効なアピールとなった。
- ・8月末まで早いペースで「賀茂高だより」を発行できており、順調にすすめて行けば、年度目標は達成できると考えられる。

#### 【今後の改善方策】

##### ① 積極的な情報発信

- ・更新が滞りがちなページをチェックし、迅速な情報発信によって、アクセス数を確保する。
- ・行事や部活動の報告などの更新を適時、迅速に行っていく。

##### ② 中学生へのアピール

- ・案内を送付するエリアを広げ、より多くの中学からの参加を呼びかける。生徒会、部活動の参加体勢を早期に確立するとともに、在校生との座談の場を設けるなど、生徒による中学生へのアピールを強化する方策を考える。
- ・これまでの発行ペースを維持し、遅滞がないようにすすめて行く。

学校経営目標				
達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等
5 教育環境を充実する：生徒が安心できる校内環境の整備と働き方改革を踏まえた業務改善を推進する。				
教育相談体制の充実を図る。	校内の教育相談体制について生徒・保護者へ周知するとともに、スクールカウンセラーの有効活用を図る。	B	教育相談の期日を複数の経路・方法で周知し、必要な生徒が教育相談を受けることができた。	環境保健 生徒指導
	特に配慮を要する生徒の情報を共有する。	B	不登校対策委員会や巡回相談を実施しており、その事前・事後、学年会等で情報の共有ができています。	
職員の働き方改革を推進する。	月曜日の定時退校を教職員に浸透させ、超過勤務時間の縮減に努める。	C	4月以降、毎月の超過勤務時間についてデータを集計した結果、80時間以上の教職員の人数は減っているものの、依然として実態がある。	各部主任 管理職

【評価結果の分析】

① 教育相談体制の充実

- ・全校生徒に教育相談についてのプリント配付、クラス掲示、HP掲載、Classi で発信した。また、別途、保健だよりでも教育相談を紹介している。
- ・特別支援に関する研修会で教職員の共通認識を形成するとともに、担任を中心に学年会、生徒指導部、環境保健部等が連携し、個別の生徒に関する状況の把握に努めている。

② 働き方改革の推進

- ・各月の超過勤務時間に加え、単独の月曜日の超過勤務時間を集計し、超過勤務時間の推移を確認している。年度当初の4月は、仕事量が多く、80時間／月を超える教職員の数も多かったが、5月から8月までは月を追うごとに超過する教職員の数が減っている。8月は、夏季休暇や一斉閉庁日などもあったため、9月の集計結果が6月や7月の結果を超えないよう注意する必要がある。

【今後の改善方策】

① 教育相談体制の充実

- ・学年会や分掌等で生徒情報を出し合い、個別の生徒には、担任および養護教諭を通して声をかける。欠席しがちな生徒やその保護者によびかけ、カウンセラーにつなげていくことが課題である。
- ・今後も個別の生徒の状況を把握し、必要な支援や配慮を協議し、対応していく。併せて非常勤講師も含めた全教職員が生徒情報を共有できるよう留意する。

② 働き方改革の推進

- ・今後一層、月曜日の定時退校を定着させるとともに、考査期間中に早く帰ることができるよう取り組んでいく。抜本的に解決するためには、部活動の指導方法等の変更についても検討する必要がある。

## 令和元年度自己評価シート（中間評価まとめ）

校番	24	学校名	広島県立賀茂高等学校	校長氏名	大石 秀邦	全日制	本校
----	----	-----	------------	------	-------	-----	----

## 1 評価結果の分析

(1) 学ぶ：生涯にわたり学び成長する「優れた学習者」を育てる。

- ・授業評価アンケートから、昨年度の同時期の数値（89.5%）を上回り、目標値を達成していることがわかる。研修会において、分析力・活用力の伸長を目指した授業改善、定期考査問題の作成、「賀茂コンピテンシー」育成のための評価指標の作成と活用が課題として明確になった。
- ・国際交流に向けた準備計画は順調に行われているが、1学年の生徒では姉妹校にまだ馴染みがなく、取組をすすめる中で主体性を育てていく必要がある。

(2) 挑む：高い目標を持ち、それに向けて自律した行動がとれる生徒を育てる。

- ・模試の復習ノート等の作成を各学年で取り組み、特に誤答や弱点分野の補強を意識した授業を展開している。例年通り夏季補習日程を組み、弱点教科では並行して土曜講座に参加できる体制を整えた。
- ・Classi や学習時間記録シートに書いた内容を生徒と担任が共有し指導に活かすことができた。教科担当者とも学年団の中では共有できたが、学年間で共有するための方法が確立していない。

(3) 貢献する：規範意識が高く、他者を思いやり貢献する生徒を育てる。

- ・教員が率先して挨拶することは、日々実践されている。積極的に挨拶をしている生徒も多いが、心の通う挨拶になっているかどうか課題である。
- ・特に生徒会理事においては各委員会を動かし、生徒たちで責任を持って活動していこうとする動きがみられた。各委員会も責任を持って行動できた。
- ・掃除点検の1回目はPTA総会前日、2回目は終業式前に行い、掃除の目標を意識させることができた。平素、掃除が行き届かない所をあえて点検項目に含めたため「できていない」が若干多くなったと考えられる。

(4) 広報活動を充実する：保護者・地域の信頼と期待を高め、誇りが持てる学校にする。

- ・月の平均アクセス数が4000件以上と安定しており、ホームページが学校からの情報発信ツールとして保護者、地域社会に認知されていることがわかる。
- ・校長 eyes による更新が頻繁に行われていること、各種通信物による更新が定期的に行われていることがホームページの更新回数増加の大きな要因になっている。
- ・8月末まで早いペースで「賀茂高だより」を発行できており、順調にすすめていけば、年度目標は達成できると考えられる。

(5) 教育環境を充実する：生徒が安心できる校内環境の整備と働き方改革を踏まえた業務改善を推進する。

- ・全校生徒に教育相談についてのプリント配付、クラス掲示、HP掲載、Classi で発信した。また、別途、保健だよりも教育相談を紹介している。
- ・特別支援に関する研修会で教職員の共通認識を形成するとともに、担任を中心に学年会、生徒指導部、環境保健部等が連携し、個別の生徒に関する状況の把握に努めている。
- ・各月の超過勤務時間に加え、単独の月曜日の超過勤務時間を集計し、超過勤務時間の推移を確認している。年度当初の4月は、仕事量が多く、80時間/月を超える教職員の数も多かったが、5月から8月までは月を追うごとに超過する教職員の数が減っている。

## 2 今後の改善方策

(1) 学ぶ：生涯にわたり学び成長する「優れた学習者」を育てる。

- ・教科会等で授業の在り方について検討する。1学期後半の互見授業に加えて、2学期以降も授業の公開や参観の機会を設ける。シラバスの計画通り、パフォーマンス課題を実施する。
- ・10月下旬に、外部指導者を迎えて、地歴・数学・保健体育・外国語（英語）の各教科が公開授業研究会を実施する。この研究授業や授業検討会を通して、目指すべき授業像について理解を深めていく。

- ・10月の姉妹校修学旅行団との交流及び11月の広島大学大学院国際協力研究科留学生との交流で、生徒がそれぞれの役割を担った交流ができるよう企画を進めていく。

(2) 挑む：高い目標を持ち、それに向けて自律した行動がとれる生徒を育てる。

- ・AO・推薦入試に挑戦する生徒の、出願・小論文・面接指導担当を全教科に割り当て、丁寧に指導をしていく。終了後は早期に切り替えを行い、センター試験や個別学力試験の力をつけることができるよう教員が出来るだけ問題を多く解いた上で、指導できるようにする。
- ・Classi や賀茂手帳、学習時間記録シートの活用で学習習慣も定着し、2学年は模試の成績も安定してきたが、1学年はまだ学習習慣がついていないという課題がある。新テストへ向けて1・2学年は試行錯誤が続いているが、本校のベストの進路指導の方策を模索しつつ、引き続き現在行っていることを確実に実施していきたい。
- ・Classi への入力習慣化していない生徒には、校内の情報教室のPCを使用させて入力させる。
- ・各部の部員としての自覚を持たせ、挨拶や礼儀などを徹底指導する。部顧問と担任、教科担当が密に連携し、指導する。

(3) 貢献する：規範意識が高く、他者を思いやり貢献する生徒を育てる。

- ・教員による挨拶は日々実践されている。挨拶の効果を増すためにも、プラス一言の実践を促していきたい。
- ・生徒会理事に、後期は校内を見渡し、自分たちができることを考えさせるとともに、各委員会ですてきた議題を各クラスで共有を徹底させるとともに積極的にクラスを動かしていけるようにさせる。
- ・掃除点検の結果を公表し、翌日からの掃除の重点項目として活用する。美化委員と掃除監督、担当の掃除班生徒が点検の結果を共有できるよう学年会等を通して積極的に掃除の実態と改善点を周知する。

(4) 広報活動を充実する：保護者・地域の信頼と期待を高め、誇りが持てる学校にする。

- ・行事や部活動の報告などの更新を適時、迅速に行っていく。
- ・案内を送付するエリアを広げ、より多くの中学からの参加を呼びかける。生徒会、部活動の参加体勢を早期に確立するとともに、在校生との座談の場を設けるなど、生徒による中学生へのアピールを強化する方策を考える。

(5) 教育環境を充実する：生徒が安心できる校内環境の整備と働き方改革を踏まえた業務改善を推進する。

- ・学年会や分掌等で生徒情報を出し合い、個別の生徒には、担任および養護教諭を通して声をかける。欠席しがちな生徒やその保護者によびかけ、カウンセラーにつなげていくことが課題である。
- ・今後も個別の生徒の状況を把握し、必要な支援や配慮を協議し、対応していく。併せて非常勤講師も含めた全教職員が生徒情報を共有できるよう留意する。
- ・今後一層、月曜日の定時退校を定着させるとともに、考査期間中に早く帰ることができるよう取り組んでいく。抜本的に解決するためには、部活動の指導方法等の変更についても検討する必要がある。

### 3 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策

- (1) 指摘を頂いたように、各評価指標については、生徒アンケートによる回答結果が指標となっている項目がいくつかある。現状として、それらに替わる適切な評価指標が見いだせていない面もあるが、次年度以降の経営計画の見直しにおいて、指摘を踏まえた客観的かつ信憑性のある評価指標について検討を継続したい。
- (2) 平成31年度に続き、令和2年度もクラス増。さらに令和3年度の増も想定したうえで、次年度以降（令和2年度～令和4年度）の経営計画及び数値目標の設定については慎重に検討していく。



## 令和元年度学校関係者評価シート(中間評価)

令和元年 10 月 31 日

校番	24	学校名	広島県立賀茂高等学校	校長氏名	大石 秀邦	<input checked="" type="checkbox"/> 定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	----	-----	------------	------	-------	---	---

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	B	目標設定については、高い目標とそれとともなう計画が設定されており、達成目標および行動計画ともに具体的で適切である。経営計画の環境分析はSWOT分析を用いて適切になされている。
計画の進捗状況の評価の適切さ	B	数値目標が設定してある項目で、結果の数値(根拠)が記載されていないものがある。姉妹校交流では、「C」の評価よりも「B」の評価が適切ではないか。進学者数、中途退学者数等客観性のあるデータに比べ、アンケートによる回答においては、回答者の意識も異なるため、データを 20%以上の幅でとらえる必要がある。「数値には説得力がある」と錯覚を起こす危険性があることを認識しておくこと。
目標達成に向けた取組の適切さ	B	どの項目においても、目標達成に向けて具体的な取組がなされている。
評価結果の分析の適切さ	B	概ね適切に分析されているが、数値目標に対して結果が記載されていない項目がある。また、部活動に加入していなかった 3 年生の状況や、部活動加入率が低下傾向にある要因については、他校比較とともに評価する必要がある。HP へのアクセス数についても、相対比較がされなければ評価は難しい。定時退校が進まない原因が部活動だけなのか、精査する必要がある。
今後の改善方策の適切さ	B	多くの項目においては、上半期の実態を踏まえ、具体的な方向性が示されている。GTEC については、向上策が不明である。
総合評価	B	行動計画が具体的に示されており、その取組がなされている。教職員の働き方改革については、日常業務を見直すなど、思い切ったそぎ落としが必要である。次年度以降(令和2年度～令和4年度)の数値目標の設定について、学級増を踏まえ慎重に考えていく必要がある。「評価の時代」という厳しい状況の中で、計画の策定、達成のための取組等、よく頑張っている。